

---

# 雉飼 狂子と魔術師たち

瑠璃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雉飼 狂子と魔術師たち

### 【Nコード】

N9398A

### 【作者名】

瑠璃

### 【あらすじ】

古の邪神たちの魔の手が某都道府県S市のベッドタウン仏滅町へと迫り来る！雉飼狂子と魔道書【んこみのろくね】の第二章の始まりです！

## プロローグ（前書き）

第二章の始まりです^^；  
へたくソな文章ですが応援してくださいませ！

## プロローグ

### プロローグ

すべての始まりは“本物”の魔術師の書き込みもあると言われるオカルト系超人気サイトとマスコミにも、その話題が取り上げられたこともあるブラックセフィロトという掲示板群に書き込まれた“とある記事”であった。

最凶にして最高、至高なる唯一絶対の魔道書「キタブ・アル・アジフ」

その魔道書が仏滅の名を冠する不吉なる町にいずこかに眠る。

アル・アジフを手にする者は古の邪神の力を手にし、この世界に千年王国を築くであろう。

さあ、魔術師諸君！ ご自慢の魔道書、最強の使い魔、宝具をたずさえてやって来るがいい！ そしてラグナロクを起こそうじゃないか！

というもので、そんな奇妙な書き込みがあったことに気がつかなかった俺、犬飼 修一は、オカルト系超人気サイトであるブラックセフィロトの常連であった。

そんな頃、海洋冒険家であり、海洋考古学者、トレジャーハンターとしてもその道じゃ有名人である父、修三郎の訃報を知らせる電話のベルが鳴り響きのだった。

## 第一話「魔術師の町」（前書き）

前章のキャラたちが続々登場かな？

新キャラもたくさん登場です＞＜

あ、登場人物が多すぎだなあ（汗

## 第一話「魔術師の町」

### 第一話「魔術師の町」

『私は忙しい』、『話はあとで聞く』、『今、手が離せない』、『今日も帰れそうにない』

つい先日、ノードリアン島という南太平洋上に浮かぶ無人島において、まるで死後3000年は経過したエジプトのミイラを連想させるようなカラカラに乾燥した屍となつて発見された父、犬飼 修三郎は、生前、この4つの言葉ばかり口にしていた覚えがある。

まったく、どんな仕事に勤しんでいたんだか……。今となつてはどうでもいいことが

ま、とりあえず同じ穴のムジナの間じや有名な海洋冒険家、海洋考古学者、そしてトレジャーハンターであつたようだが

そんなこんなで俺、犬飼 修一は、早々と父の葬儀を済ませると数年前から現在別居中の母親の蒼十寺 茜の実家がある某都道府県S市のベットタウンである仏滅町へと、弟の修一と一緒にやって来るのだつた。

「やっと着いたね、兄さん」

「ああ、やつとな。お袋は元気かな……。まあ、元気だろうな」  
幼い頃の思い出がいっぱい詰まった町、それが仏滅町である。

この町へとやって来ると、自然と脳裏に幼い頃の思い出が蘇ってくるものだ。

楽しい思い出も、思い出したくない忌まわしい思い出も

「ねえ、兄さん。8年前のこと覚えてる？ 僕はまったく……」

「そうか、覚えてないんだな。俺はとりあえず……」

修二の奴は年に何度も母親の茜に逢いに仏滅町へと来ているようだが、俺がこの町へとやって来たのは大体、8年ぶりくらいになる。ちよつとイヤな思い出があつて、それが原因で……。

それはともかく、須佐野橋商店街アーケードって場所は、幼い頃に訪れたあの時とまったく変わっていなかった。

「ねえ、兄さん。父さん、なんで死んじゃったんだろ……」

修二が立ち止まって陰鬱な声色でつぶやく。

「知るかよ、あんな奴がどうなるうと……」

俺は少なからず父親に恨みを抱いていただけに死んでくれて清々していた。

「僕は年に何度か仏滅町へ母さんに逢いに来てるけどさ。兄さんはずっとご無沙汰だね、母さんと逢うのは……」

「ああ、そうなるな。まあ、親父と同じで顔も見たくない人だがな」  
亡くなった父親と同様、俺は母親の顔も見なくなかった。幼かった俺を、弟の修二を置き去りにするかたちで実家へと帰るような人だし……。

しかも自分から逢いに来ないし……。

まったく両親ともに最悪だ、ホント……。

「ねえ、この店、まるでテロリストにでも襲われたみたいだよ……。  
一体、どうしたんだろうね」

「ん、あ、ああ……。たしかにな」

修二がまるでテロリストに襲われたような店、と言って怪訝そうに指差す先に視線を向けると、そりやもう酷い有様……ありていに言えば、来客すべてを巻き込んだ自爆テロでも行つたかのような惨状で、床の所々に赤黒く変色した血の痕のようなものがこびり付いているそんな様子さえうかがえる一軒の店の様子が映り込む。

「殺人事件かなにかあつたのかな？」

興味はある。だけど、触れる必要はない……。俺には関係ないことだし……。

「うふふ、この店は数日前までオカルトグッズ専門店 黒鴉 として、私のような人間の間で地味に人気を博していた店なのよねえ」

と、殺人事件、自爆テロ……。そんな物騒な事件に巻き込まれたことで一種の廃墟と化してしまっている目の前の封鎖された店の様子を見つめている僕と修二に対し、聞いてるだけで不愉快な気分になるような笑いとともに、そんな風に声をかけてくる者が現れる。

「ふん、なにはともあれ……。キミたちを迎えに来たのよ、犬飼兄弟！」

悪魔系と言っても間違っていない漆黒のゴスロリな格好の上から外側が黒、内側が真紅というドラキュラを連想させるようなリバーシブルなケープを羽織っている見る者を遠ざけるような冷たい印象を受ける一方で、成熟した大人の女性の魅力もひしひしと感じさせる20代半ばくらいの髪の長い若い女である。ついでに言うておくと、容姿端麗、才色兼備という四字熟語がよく似合い姿を台無しにするような傲岸不遜な態度が目に残る。

さて、そんな女はニヤニヤと笑いながら、僕らのことを迎えに来た、言うのだった！

「僕らを迎えに来た！？ お姉さん、誰ッッ！」

そう言うつと修二はコソコソと俺の後ろに隠れる。

「おいおい、アンタ一体……」

「私？ 私は雉飼 狂子よ。アンタたちの母親から迎えを頼まれた者ってところよ」

俺の後ろの身を隠し、女の行動を警戒する修二を庇うかたちでいると女は、雉飼 狂子と名乗り、母さんの使いとして俺らを迎えに来た、と言って冷笑を浮かべる。

「か、母さんの使いだって！？ ホントかよ……」

そう俺が口にした次の瞬間だった。



「そうよ、なにか文句あるッッ！」

それは内の秘めた……。いやいや、なりを潜めていた魔性のモノ  
が牙を剥いたかのように、ガツといきなり雉飼 狂子と名乗る女の  
白く細い右手が次の瞬間、俺の襟首を掴み上げる。

## 第一話「魔術師の町」その2（前書き）

新たな創作魔道書や法具、なんかも考え中ですw  
さて、さらっと登場人物紹介でもしておきます。

### 【登場人物紹介】

犬飼修一 第二章の主人公。20歳。

長身痩躯で目付きは悪いが男前。

性格は優柔不断で中途半端。

8年ほど前に、仏滅町で起きた“なにか”に巻き込まれたようだが、

そのときの記憶がない。そのこともあってか母親の茜と疎遠状態に……。

犬飼修二 修一の実弟で小学6年生。

明るく無邪気な少年。

修一とは違って年に何度も母親に逢いに仏滅町へ来ている。

雉飼狂子 第一章、第二章と通じて登場！ 真の主人公のような人物。

通称、女クロウリーと呼ばれることもある魔術師であり、

アンドロイドを造り出すほどの科学者でもある。

容姿端麗、才色兼備な美人だが性格は最悪。傲岸不

遜な。年齢は26歳。

魔道書【んこみのろくね】の所持者。



## 第一話「魔術師の町」その2

### 第一話「魔術師の町」その2

後々になって知ったことなんだが、俺　犬飼　修一の母方の曾祖父に当たる蒼十寺　御影って人は、仏滅町って名前の町のあちらこちらに、天宮　弓子って人と一緒に“なにか”封印したらしい。その前に、曾祖父は“本物”魔術師だったとか……。にわかに信じがたい話だけどさ。

さて、詳しくは知らないが、某都道府県S市のベッドタウンとして1990年代初頭のバブル経済期に急速に発展を遂げたようだけど、それ以前から仏滅町は存在したようだ。

その証拠とばかりに安座主公園とかいう公園の一部が奈良時代以前の古墳である。

埋葬者はかつてこの辺一体を支配下に治めていた豪族だとか、大和朝廷に従わず滅ぼされ、歴史の闇の中へ消された古代王朝の唯一の名残りだとか言われているらしい。

ま、どうでもいい話だけどな。

それはともかく。

「ねえ、母さんのところへいつ連れて行ってくれるのさ？」

修二がジーツと嫌味な女を　雉飼　狂子を見つめながら訊く。

「ん、もうちよつと待ってネエ」……つと、このネックレスいいわあ」

さてと、雉飼　狂子って女は知らん顔で目の前の全品1000円セール実施中という謳い文句が書き込まれているプレートが貼って

あるショーケースの中のネックレスを漁っている。おいおい……。

俺と修二、そして雉飼 狂子は、須佐野橋商店街アーケードの一角にある安売りアクセサリーショップ ニビル のちょっと狭苦しい感じがする店内にいる。

「はあ、女の買い物つてのは長い……。ある意味、相場が決まっているんだよなあ……」

修二はともかく、俺は来る気もなかったけど、雉飼 狂子って女が無理矢理……。

「さっさと買い物を買わせてくれよな！」

と言いつつも無視する雉飼 狂子に対し、俺は苛立ちを覚える。

この女、雉飼 狂子 以後、狂子さんと呼ぶことにしよう。

それはいいとして、この女……。ホントに母さんの使いなのか、それが分からなくなってきたよ。

「あれ、あの女の人、どこへ行っただろ？」

「そついやどこへ行っただろ……」

ちよつと目を離れた隙に狂子さんの姿が、俺と修二の目の前から消える。

ふう、狂子さんはどこへ行っただろう。まったく……。

「うふふ、ラグナロクが始まるよ」

「えっ!？」

狂子さんは近くに居るんだろうか？ 周囲をうかがっていると、不意に俺の横を通り過ぎて行った奇妙な幾何学模様が施されているトランペットを首から下げた10歳かそらの白いワンピースを長い黄金色の髪をなびかせた外国人の女の子が、そんな奇妙な言葉を口にする。

「ねえ、どうしたの？」

「今、ヘンな女の子が……」

「女の子？ 誰もいないけど……」

「えっ!？」

怪訝そうに修二は、俺ら以外、“誰も居ない”、そう言って首を横に傾ける。

た、たしかに、俺と修二以外、誰も近くにはいない。な、なんだっただ、一体!?

「あれ、なにやってるのよ、アンタたち!」

ニヤニヤと微笑む狂子さんが、俺と修二の許へ如何にも都合よくって感じで現れる。

「ふむ、弟くんは見ていないようだけど、アンタは見たようね、ヘイムダルを」

「へ、ヘイムダル!？」

と、狂子さんが俺の耳元で、“ヘイムダル”という意味深な言葉を囁く。

(ヘイムダルっていうと北欧神話に出てくる神々のひとりだったな……)

ヘイムダル、と聞いて俺は北欧神話を連想する。

神々の黄昏ラクナログの訪れをギャラルホルンを吹き鳴らし、主神オーディンらアースガルドの神々に告げる存在、それがヘイムダルである。

「これから面白いことが、この町で起きるわよ! 楽しみだわあ」  
これから面白いことが起きる、と言って狂子さんは狂喜する。

「面白いこと!？」

「うふふ、それは後々のお楽しみってことで……。さあ、行くわよ、アンタたちの母親である蒼十寺 茜がところへ」

さて、面白いことが起きる、と俺に対し言っただけで狂喜する狂子さんの右手には、いつの間にか買い物袋が握られている。林檎やバナナといった果物、長葱に茄子などの野菜の他、チョコレート菓子等のお菓子の箱が何個か買い物袋の中に見受けられる。

おいおい、別の店へ行ってたのかよ、まったく……。

それはともかくだ。

「ふう、やっとか……」

「なにか文句がありそうねえ……」

「い、いや、特に……」

「あつそ、それならOK！　じゃ、行くわよお」

この女！　長々と待たせやがって！　俺は相槌を打ちつつ、そう言いたかったけど止めておいた。

なんていうか、第六感的ななにかが“やめておけ”と警告を発しているような錯覚を覚えたからだ。

単に俺が臆病者ってだけかも知れんけど……。

「う、うん、じゃあ、行こうか……」

「うんうん、行こう、母さんのところへ！」

修二は気楽でいいよなあ……。俺は胸中で溜息をつきながら、一足先に全品1000円セール実施中という謳い文句が掲げてあるアークセサリーショップ　ニビル　の外へと出ていた狂子さんの後を追いかけるのだった。

町の歴史が古ければ古いほど旧家と呼ばれるような何百年と続く古い家柄もたくさん存在する。

現在は某都道府県S市のベッドタウンであるが、その歴史は奈良時代以前から脈々と受け継がれているという仏滅町の場合、大体が“ある旧家”の分家に当たる家柄だけど、その数はけっこう多い。

あえて言えば、天宮、十夜、水無月、冴草、月ノ宮、氷野……など、それら分家の頂点に立つのが本家である蒼十寺

んで、そんな蒼十寺家の現当主というのが、俺の母親である茜であるとか……。

それはともかく。

母親とは何年も顔を合わせていないだけに、俺は複雑な心境である。

「さて、着いたわよ。降りて、降りて！」

赤いシャープな車体が目立って見える狂子さんの派手な愛車の後

部座席から複雑な心境が醒めぬまま車外へと降りる俺の双眸には、築200年以上は確実に経っているだろうと思われる優美で奥ゆかしい屋敷が悠然としたかたちで映り込む。

ついでにだけど、堅牢な白亜の石造りの塀と漆喰が施された木造の表門が、悠久の年月つてものをひしひしと感じさせる。

「ははは、8年前、最後にこの町へ来た時とまったく変わってないな。ここだけ時間が止まってしまっているかのように思えるぜ」

8年前とまったく変化がない。そうあの時からずっと変わらない屋敷の様子に、俺は思わず冷や汗をかく。

「なにやってるの！ 早い来なさいよ！」

ニヤニヤと微笑みながら、手招きをする狂子さんに先導されつつ、そんな屋敷の中へと俺は恐る恐る入り込むのだった。



## 第一話「魔術師の町」その3（前書き）

新キャラ登場です^^

あと、ちらつとですが新魔道書も登場させます！  
次回、その解説でも載せようかと思っています。

## 第一話「魔術師の町」その3

### 第一話「魔術師の町」その3

我々人類が母なる惑星、太陽系第三惑星こと地球の大地に誕生するずっと以前、宇宙の暗闇からやって来た旧支配者グレートオールドワンと呼ばれる邪悪な神々が支配していた暗黒に時代があった、と学会で提唱し、変人扱いされた奇妙な科学者が、この町 仏滅町に住んでいるようだ。『俺は生きている間に必ずムー、レムリア、アトランティスなど、超古代文明は育んだ幻の大陸の痕跡を見つけ出す!』  
そんなロマンスあふれる熱い言葉である一方で、聞く人間によっては奇妙な言葉として思えない言葉を生前しつこいくらい言っていた父さんとは、誰がなんと言おうと間違いなく同じ穴のムジナだろうな、きつと……。

8年前のちよつとした出来事が起因し、母親とは疎遠状態に……。いやいや、単に俺が逢いに行かないだけなんだが  
ま、とにかく、母親に逢うのは8年ぶりくらいになるだろうな……。はあ、複雑だよ、まったく。

「ここへ来れば、思い出せるかな、8年前のあの日のことが」  
記憶つてのは曖昧なものである。  
忘れたい記憶は忘れられず、忘れたくない記憶は忘れてしまう。  
俺の場合、8年前 現在、20歳なんで12歳の時の“あの時”の記憶だけが見事に消失してしまっている。

ただ、夏祭りの夜 とだけ断片的な記憶が残っているのみであ

る。

母親の実家、堅牢な白亜の塀と漆喰が施された木造の表門を備えた築200年は数える奥ゆかしい日本家屋。　　っていうのは、外装だけ。家の中へと一歩でも足を踏み入れれば、そこはつい最近リフォームされたことが分かる鼻腔をくすぐる塗料等の臭いなんかが充滿していたりする洋風の内装に思わずあつと驚かされる。

外装は築200年は経過していると思われる奥ゆかしい日本家屋が雅な和風な造り、内装は如何にも今流行りのって感じがする最新式の洋風な造り……。和と洋の融合、それはあるだろうけど、こんなある意味で相反しているかのように思える外装と内装のギャップの激しさはまさに異端である！

「ふう、なんだかなあ……」

さて、外側と内側のギャップの違いに戸惑っていると

「あらあ、いらつしやい」

どこかトロくさい感じがする女の声が聞こえてくる。それと同時に、茶の間と思われる部屋から煎餅を口にくわえた長い漆黒の髪を黄色いリボンで三つ編みに束ねている若い女がひょっこりと顔を出す。

「楓さん、こんにちは」

修二がニコッと笑いながら、その女を楓さんと呼び、左手を大きく横に振る。

楓さん　俺と修二の叔母に当たる人物である。

まあ、叔母と言っても母親の茜とは19歳も年が離れているので今年20歳となった俺とはそれほど年が離れていない。叔母というか姉ってところかな。

ああ、容姿だけど、ビール瓶の底のような分厚いレンズが特徴的な眼鏡の下から覗く常に眠気と闘っていそうなタレ目には思わず笑いそうになるが、とりあえずは才色兼備な容姿が映える美人である。ちなみに、水色の無地のＴシャツとジーンズを着こなしている。

それはともかく。

「うみゆう……。狂子ちゃんも一緒ですか！」

偶然、狂子さんと目が合った楓さんは、口にくわえた煎餅をポロリと落つことす。

「あらあ楓さん　貴女もいたんだあ」

「う、うん……。あたしの実家だし……。それより、なんで貴女が？」

「師匠にこのふたりを呼んで来いって言われてねえ」

「そ、そうなんだ……」

とそんな相槌を繰り返す楓さんと狂子さん。

「師匠？」

“師匠”と聞いて不思議そうに修二が、首を横に40度くらい傾けながら訊く。

「ん、アンタたちの母親のことよ。わたしにとっては師匠なのよ、彼女は」

ニヤと修二を見つめながら微笑む狂子さんは、俺と修二の母親である茜は自分にとっては師匠である、と説明する。

「師匠ねえ……。一体、なんの師匠なんだか……」

母親の茜と狂子さんは、どんな趣味等々で師弟関係にあるのか？そこらへん気になることは気になるけど、あえて俺は訊かなかった。

そんな時だった。

「おや、馬鹿息子たちが来たみたいだねえ」

懐かしいようで、忌まわしいようで……。ま、なんていうか俺にとっては喜ばしい存在ではない者の声が聞こえてくる。

「あ、母さん　　僕、来たよ！」

「お、おい、修二！」

その声にいち早く修二が反応する。んで、喜び勇むように靴を脱ぎ捨てると、爆竹の軽い爆発音のような微妙に大きな足音を奏でながら、今居る母親の実家である旧家蒼十寺家の屋敷の中へと入り込

み霞さんの眠そうな顔が覗く茶の間へと駆け込むのだった。

「はあ、なんなんだよ、まったく……」

仕方なく俺も靴を脱いで修二の後を追いかけるのだった。

蒼十寺家は33代続く古い家柄である。

んで、初代当主であった蒼十寺 御朔という人物は源平合戦で活躍した武将であったと聞く。

あくまで『源平合戦裏文書』とかいう書物のみそれが記されているので、史実なのかはどうかの詳細は歴史の闇の中である。

さて、俺 犬飼 修一の目の前には、紺色のスーツとタイトスカートという格好をした柔和な表情だが、どこか近寄り難い威厳も兼ね備えている茶色く染めたショートカットがよく似合っているオバサ……いやいや、8年ぶりに顔を合わすこととなった母親の茜の姿がある。

（むう、8年前とあんまり変わらないな、母さん……）

と胸中でつぶやいた通り、母さんの容姿は8年前とあまり変化がない。

俺の母親の茜は、目鼻立ちが整った容姿端麗な美人なんだけど、童顔っていうかなんていうか実年齢は今年で45歳なんだが、外見年齢は30代前半くらいと若々しい容貌をしている。まあ、そんなわけで、下手すりゃ親子と言ってもいい19歳も年が離れている妹の楓さんとは、若々しい容姿のおかげでそれほど大差がない年齢に見られがちだ。

修二の話だと、そのことが母さんの自慢のひとつらしい。

今、俺は母親である茜と叔母の楓さんの住まいであり、今日から俺と修二の自宅となる予定である蒼十寺家一階茶の間にいる。

母さんや楓さんの趣味かはどうかは知らないが、洋書、和書に問

わず分厚い本がぎっしりと詰め込まれている年季の入った本棚やテーブル、ついでにソファーなどのアンティークな家具が目に残る。ああ、テレビや今じゃ一家に一台、もしくは二台の割合で普及しているパソコンなんかも置いてある。

さて。

「修一、アンタとこうして面と向かうのは大体、8年ぶりになるねえ。元気だったかい？」

「あ、ああ、とりあえずな、とりあえず……」

母さんは煙草を口にくわえたままニヤニヤと笑いながら、ジッと俺の顔を見つめてくる。

「ふう、今更だけど修三郎の葬式に出席できなかったことを謝っておくかな。さてと、一応、今じゃ夫婦別姓、半離婚状態、ついでに何年も別居している状態にあるけど、アイツは一応、あたしの夫だった男つてことで心中は複雑な気分だよ、まったく……」

父さんの葬式に出席できなかったことを謝罪したうえで、今度はプイツと俺から眼を逸らす母さんだが、その心中は複雑な模様だ。まあ、当然だろう……。一応、現在は夫婦別姓で別居状態とはいえ、離婚はしておらず……っていうか、妻としては複雑な気分だろうな。

「義兄さんが亡くなった場所ってノーダリアン島ってところだよな？　確か、首なしの気味の悪い巨像が何体も存在するらしいわ」

茶の間のパソコンと向き合っている楓さんが、不意にそんな話をする。

「もしかしてブラックセフィロトの情報かな？　あ、俺がよく覗くオカルトサイトですよ」

父さんが亡くなった島　ノーダリアン島に関して俺は、インターネットである程度検索していた。

主に、ブラックセフィロトという大手オカルト専門掲示板群で「わあ、修一くんはあのサイトのこと知ってるんですか！？」あ、あたしはあそこの常連ですよ　管理人の白鴉さんともネット友達

です！」

俺もよくブラックセフィロトを覗くよ、そう言つと楓さんは、ビール瓶の底のような分厚い眼鏡の下から覗く両目を輝かせながら、自分は常連で管理人とはネット友達である、とハイテンションな感じで説明する。

「ふう、あの娘は毎日何時間も、そのブラックセフィロトってサイトに居座ってるのよね。まったく、なにが面白いんだか……」

母さんは皮肉っぽい物言いする。インターネット等に興味がない人間にとっては不思議な光景の見て取れるんだろうな、きっと。

「うにゅ、姉さんだつて毎日のようにオークションサイトを覗いてるじゃない！」

おいおい、話を聞いていると、母さんも楓さんもどっちもどっちみたいだなあ……。

ま、それはともかく。

「さて、狂子の話だと、修……。アンタはヘイムダルを見たよね。流石は、このあたしの息子だ！ うふ、少しだけ期待が持てそうね、魔術師として」

「ヘッ!？」

母さんの口から意味深な言葉が……。その前に魔術師ってなんだよ！

「ま、一応、アンタに渡しておこうか。我が家に秘蔵されし魔道書の一冊【幻獣の書】を」

相変わらず母さんは煙草を口にくわえたままである。それはともかく、そんな母さんは自分の後ろにあるアンティークな本棚から一冊の本を取り出し、それを俺に手渡す。

「な、なにこの洋書は!？ 俺は英語の成績がとてつもなくやばかつたんだ！ そんなわけで読めつて言われてもなあ……」

母さんから手渡された本というのは、収められていたアンティークな本棚と同様、如何にも初版から100年以上の歳月が経過していそうなアンティークな洋書であった。

さて、俺の高校時代の英語の成績は、今となつては懐かしい思い出なんだけど、5段階中限りなく1に近い2であつた。まあ、要するにテストがある度、毎回、赤点ギリギリつてところだったわけだ。そんなわけで洋書なんか手渡されても、俺としては困るんだよなあ……。

さて。

「その【幻獣の書】についてだけど……。ふう、こんな時に電話か……。」

俺に手渡した洋書こと【幻獣の書】について語ろうとする母さんだったが、その直後に携帯電話の着信音が鳴り響く！　どうやら母さんのものらしい。

「な、なにいいい！　また猟奇殺人だつて！　今度はどこで……。ふむふむ、分かつた。すぐに行から対策本部に主要メンバーを！」

ふう、と溜息をつきながら電話に出る母さんは、なにーっ！と次の瞬間、まるで落雷を連想させるような大声を張り上げる。

猟奇殺人とか、どうか言ってるようだけど……。

「ここ最近、多発しているのよねえ……。そりやもうおぞましい猟奇殺人が！」

狂子さんがキツと俺に対し、睨みつけるような視線を向けながら言う。猟奇殺人が多発していると

「お、おい、マジかよ……」

「えええ、ホント！？」

猟奇殺人と聞いて俺は当然驚くと、修二も一緒になつて驚く。

「マジよ、マジ！　ま、そんなこんなで刑事である姉さんは大忙しなのよ」

と楓さんが言う。さてと、母さんが刑事だつていうには知っていたけど、こう間近で事件の話を聞くとドギマギするものだなあ……。

「悪い、悪い。あたしは今から署の方へ戻る。じゃ、楓、それに狂子、馬鹿息子たちをよろしく！」



「ちょ、ちよつと!？」

楓さんと狂子さんに俺と修二のことを頼む、と言う母さんは、血相を変えて茶の間から飛び出して行くのだった。

それから1分ほど時間が経過した頃である。

「さて、修一クンだったけ？　ちよつと、私につきあってもらおうよ」

そう俺に対して狂子さんが、ちよつとした用事があるから付き合えとニヤニヤと笑いながら言うてくる。んで、グイツと俺の左腕に白く細い腕を回してくる。

(この状況は嬉しい一方、なにか意図がありそうで怖いんだよねあ……。とりあえず、彼女の行動にはきをつけておかないと！)

胸中では、そんな風に危惧するのだけど、優柔不断な性格が災いし、

「OK、暇だからいいよ」

とまあ、呆気なく了承してしまうのだった。

はあ、俺って一体……。

## 第一話「魔術師の町」その4（前書き）

魔道書をいくつかまた考えましたw

### 【幻獣の書】

著者名は不明であるが13、14世紀頃のフランスで書かれたと言われる書物。

なお、同じ内容のものが三冊存在する。

内容は古今東西の幻獣について記された書物であり、そんな幻獣の使役方法も記された書物である。ただ、著者がテンプル騎士団の関係者であったせいか、カトリック教会によって没収される。とりあえず焚書処分にはならなかったが、ブルゴーニュ地方のとある教会の地下深くに嚴重に封印されるが、前世紀初頭、ナチスドイツがフランスを占領した際にヒトラーの手に渡り、そんなヒトラーは【幻獣の書】を使ってアメリカやイギリスなどの連合国を一泡吹かせようと企んだ、と言われるが未遂に終わる。

未遂に終わった理由は様々あるが、ドイツ軍の敗戦で未遂に終わった、という説がもっとも有力視されている

ナチス崩壊後、3冊ある【幻獣の書】のうちの2冊がミスカトニツク大学へ寄贈される。

別ルートで残りの一冊が蒼十寺家にも伝わっている。

また、千の姿を持つ黒き魔獣という邪神ニャルラトテップの化身と思われる魔物についても記されている。

こんな感じです。

## 第一話「魔術師の町」その4

### 第一話「魔術師の町」その4

ふう、なんだかんだと仏滅町に市街地は広い。

今現在は、某都道府県S市のベッドタウンだけど、数年後には独立するんじゃないかな？　　んで、そう思える運動も見受けられると聞く。

ん、まあ、そうになると、“仏滅市”が誕生するんだろうな、きつと……。

「なあ、一体、俺をどこへ連れて行く気なんだよ！」

あゝ、不愉快だ、不愉快だ！　そんな気分がにじみ出した表情をつくる俺は、隣にいる狂子さんを睨みつける。

「まあ、アンタが怒る理由も分からないことはないわ。だけど、とりあえずなにも言わずに私についてくればいいのよ」

狂子さんはニタニタと口許に笑みを浮かべながら応対する。

さて、俺は狂子さんの愛車の助手席に座っている。当然、運転しているのは狂子さんだ。ああ、ついでにシートベルトはちゃんと着用しているぞ！

それはいいとして、溜息をつきながら車外の光景を眺めている俺は夏なんだろうけど、未だところで萌え咲き乱れている超遅咲きの桜の木が群生している並木道のそんな超遅咲き桜の木々の隙間から、通称、三本角と呼ばれる古のバベルの塔を連想させるかのように天にも届かんばかりの優に40階はあるだろう3棟の超高層マンションの悠然とそびえ立つ雄々しき姿が映り込む。

「通称、三本角。震度6の大地震にも耐える、なんて謳い文句で一時期、話題を集めたものよ。ちなみに、右から一棟目のムー、2棟目のアトランティス、そして3棟目のレムリア……。んで、現在4棟目のハイパーボリアが建造中らしいけど、耐震強度偽装疑いで現在調査中でもあるらしいわ」

そんな説明をする狂子さんは、左手に持った双眼鏡で引っこりなしに車外を眺望している。

一体、なにを見ているんだか……。その前に脇見運転はやめろ！「うふふ、ご心配なく。この車には自立型のAIが搭載されているから、別段、私が運転しなくてもOKなのよねえ」

「え、ええっ！？　そ、そうなのか……」

案の定、狂子さんはそんな言い訳をする。だけど、この車　狂子さんの愛車で真紅の派手なスポーツカーに自立型のAIが搭載されているって話は嘘ではなさそうだ。

よく見るとハンドルが勝手に動いているし……。

それはともかく。

「自立型AIねえ……。まあ、あの三本角と同様、俺には興味のない話かなあ……」

愛車である真紅の派手なスポーツカーに搭載されているらしい自立型のAIに運転を任せたままの状態を維持しつつ、未だに左手に持った双眼鏡で引っこりなしに車外の様子をうかがっている狂子さんの説明だと、通称、三本角と呼ばれる高層マンションは、ムー、アトランティス、レムリアという名称らしい。んで、現在4棟目のハイパーボリアが建造中らしい。

（興味はない、と言ったけど、3棟の名称が失われた超古代文明が存在したって言われている伝説の大陸の名前だな。しかし、4棟目のハイパーボリアについては知らないなあ……）

そう胸中でつぶやいていると、いきなりとばかりに狂子さんが急ブレーキを踏み愛車を遅延咲きの桜の木が萌え咲き乱れている桜並木のところに停車させる。

「あれは【終わりを告げる者】の精……」

と意味深は言葉をつぶやく狂子さんは、ニヤリと口許に笑みを浮かべる。

さて、そんな狂子さんの左手には、いつの間にか双眼鏡が……。

「な、なんだよ、一体！」

いきなり急ブレーキを踏むものだから、当然、俺は驚く。そんな感じでちよつと腹が立って怒鳴る俺に対し、

「ほら、あそこを見てみなよ」

「はあ！？」

狂子さんは俺に双眼鏡を手渡し、通称、三本角と呼ばれている3棟の高層マンションのひとつであるムーを指差す。

「ふう、なんなんだよ……っ！？ あれは」

なにを見ろって言うんだ、この人……。俺は溜息をつきながら、とりあえず双眼鏡をムーの屋上に向けたかたちで覗き込む。

双眼鏡を介して見える光景、その先には、三本角という通称で呼ばれる3棟の高層マンションのうちのひとつムーの屋上に人影が見受けられた。

「ヘイムダル！？」

あの娘、ヘイムダルって娘がムーの屋上で、なにかしらにスナック菓子を食べながらくつろいでいる様子が双眼鏡を介して見受けられるのだった。

大手オカルトファンサイトであり、その手の話題を取り扱った掲示板群である今から大体、十年は昔になるかと思うけど、黒魔術殺人事件とかいうオカルティック要素の孕んだ猟奇殺人が起こった時に、その話題に巻き込まれるかたちでマスコミにも何度か取り上げられたこともあるブラックセフィロトで得た情報だと、なんらかに事情で発禁焚書処分となった本 俗に魔道書と呼ばれる。それはともかく。

いつだったかな？ 数日前だった気がするんだけど、ブラックセフィロトの白魔術、黒魔術、カバラ等々のジャンルに問わず掲示板群のいたるところに、

最凶にして最高、至高なる唯一絶対の魔道書「キタブ・アル・アジフ」

その魔道書が仏滅の名を冠する不吉なる町にいずこかに眠る。

アル・アジフを手にする者は古の邪神の力を手にし、この世界に千年王国を築くであろう。

さあ、魔術師諸君！ ご自慢の魔道書、最強の使い魔、宝具をたずさえてやって来るがいい！ そしてラグナロクを起こそうじゃないか！

こんな書き込みが投稿させる。

まあ、愉快犯のやったことだろうと思って気にはしなかったけど、“魔道書「キタブ・アル・アジフ」”という文章がちょっとだけ気になっていた。

あれは確か、狂える詩人アブドウル・アルハザードが、西暦730年に執筆されたといわれるあの【ネクロノミコン】の原本である。さて。

「ところでアンタならミスカトニック大学のついでの情報を知らないわけがないよねえ？」

「ミスカトニック大学！？ 確か、世界中の魔道書が保管されてるっていうあの……」

狂子さんが不意にそんな話をしてくるので俺は、とりあえずそう答えてみる。

ミスカトニック大学 アメリカ合衆国マサチューセッツ州アーカムに1797年に創立された総合大学であり、この大学の図書館

には世界に数冊しかない、と言われる【ネクロノミコン】のラテン語版を筆頭として魔道書が多く収蔵されているとか。

「さてさて、そんなミスカトニック大学の図書館から、つい最近のことらしいけど、“ある魔道書”が紛失したらしいわ。まるでなにかに呼応するかのよう……」

「ヘッ!？」

「その本が、私がさっき口にした【終わりを告げる者】という名の書物よ。んで、その魔道書【終わりを告げる者】に宿る精霊というのが、あのヘイムダルよ! んで、回収を依頼する書き込みをブラックセフィロトで見かけたのよねえ」

なんだかよく分からないが、あのミスカトニック大学の数多くの魔道書が収蔵されている図書館から、つい最近の話のようだけど、ある一冊の本が紛失したらしい。その紛失したという魔道書の名称は【終わりを告げる者】、そしてその精霊があのヘイムダルである、狂子さんはキツと俺を見つめながら説明する。

で、回収を依頼する書き込みがブラックセフィロトに投稿されたらしい。

ふむ、それがなんなんだかねえ……。

さて。

「そ、それがどうしたって言うんだよ!」

狂子さんが何故、そんな話をするのか俺にはさっぱりだ。そのせいかイライラが募ってくる。

「ふう、せつかちねえ……。ま、ヘイムダルについては今のところは放っておいてもいいわ。それよりアンタには、その本【幻獣の書】の精を呼び出すための内に秘めた魔力を開放してもらわないとね」

「はあ!？」

ヘイムダルのことは今のところは放っておいてもいい、なにやら意味深な発言にも聞こえるようなことを言う狂子さん。

さて、狂子さんは続けざまに、なにがなんだか俺には理解できな

いことも言い始めるのだった。

ふう、この女、一体、なんなんだよ！ ストレスが溜まるなあ、まったく……。

「さあて、無駄話はここまで！ んじゃ、行くわよ！」

「はあ、どうでもいいけどさ。俺をどこへ連れて行く気なんだよ、まったく……」

「うふふ、ヒ・ミ・ツよ、秘密」

「秘密だあ？ はあ、イライラするなあ……」

おれをどこへ連れて行くか？ そいつをそろそろ教えてほしいところだけど、狂子さんはニヤニヤと笑いながら誤魔化すばかりでまったく教えてくれる気はない様子だ。

それが俺のイライラをさらに誘発させるのだった。

仏滅町でもつと賑わっているのが須佐野橋商店街アーケードつてところらしい。

表通りは昼夜に問わずワイワイガヤと騒がしいが、裏通りへと一歩足を踏み入れると、そのは別世界と言っても過言じゃない穏やかなにもない静寂が支配する昏い空間が広がっている。さらに、いくつもの廃ビルや無人のアパートがあり、そこを根城にしている警察のお世話になることが、ある意味で日課のようなゴロツキなどのアウトローな輩も多いようだ。

一見すると平和な町、だけど、実際は悪が蔓延る危険な町つてところだろうか？

まあ、それはどこの国のどこの町だろうと、人が住む場所は危険と隣り合わせだろうな、きつと……。

さて、それは人目につく機会が減多にない須佐野橋商店街アーケードの裏通りで起きた怪事件である。

「こりゃ、一体……」

今日も相変わらず仲間のゴロツキどもと馴れ合うために須佐野橋



商店街の裏通りへとやって来た男は、如何にも無愛想で挑発的なその顔に恐怖を彩らせている。

男が恐怖を抱くもの それは彼に足許に無造作に転がっているモノである。

「し、死んでるのか、コイツ……」

それは悪趣味なピンク色の全身タイツに身を包んだ男、だった今じゃ生命活動の一切が停止し、タダの肉塊と化したものである。つまり死体だ。

「ひ、ひいいい！ 死体がまだ……」

男は低く呻く。そんな男の視線の先には、足許に無造作に転がっているピンク色の悪趣味な全身タイツの男の屍と同じような格好した屍が何体も見受けられる。

どんなに強がっていても、こんな状況下で冷静さを保つことなど皆無に等しい。

仮に冷静さを保つことができる者がいたら、余程、精神力が強いんだろうなあ……。俺だって無理さ、絶対に

まあ、そんなこんなで男の顔が徐々に青ざめていく。

「お、俺は、俺は知らないぞ！ な、なにも、なにも見てないぞ！」男は青ざめた顔のまま、その場から逃げ出そうと踵を返す。

だが、まるで金縛りにあつたかのように全身が硬直し、身動きが一切できなくなる。

「う、うわああああああ！ う、動けない！ 動けないいいいいい！」

音程の狂った声色で男は呻く。

「はあ、目撃されちゃったか……」

ゾツとするような昏く寒気が走る声が響きわたる。だが、どこか優しい女性の声でもある。

「な、なんだ、お前は！」

大量殺人の現場を遭遇し、思わず冷静さを欠く男が恐る恐る背後を振り返ると、そこには夕日のように紅い服に身を包む背中まで伸

びた漆黒の髪を吹き抜ける風になびかせる小柄な16歳かそのらの少女の姿がある。

「うほっ！」

少女の“美少女”という言葉がよく似合う目鼻立ちが整った美貌に思わず男は見とれてしまう。が、どんなに見とれようが思わずゾツとする冷氣、そして闇の中を蠢く魔性のモノを連想させる昏い狂気のようなものを孕んでいるかのような少女の鬼気迫る雰囲気第6感的ななにかとして感じ取る男の表情に恐怖を彩る。

触れてはいけない存在！ 近寄ること許されざる禁忌の存在！  
人在らざる魔性の存在！

生きていてはいけない存在！ 悪意が凝り固まった存在！ 闇を蠢く悪鬼羅刹！

男の脳裏にそんな言葉が次々と駆け巡る。

「ふふ、ずっと見つめられるというのは照れくさいものだ」

見つめられることに対する照れくさを大人の色気と子供の無邪気さが入り混じった微笑むで表現する少女だが、その次の瞬間、柔和な表情に狂気が宿る。それは穏やかな猫が獰猛な獅子へと豹変したかのような。いや、内に秘めた濃密な邪気を開放したかのような。「さて、これはもらっておくよ」

「えっ！？」

呆然としている男の両耳に、ビシャッ！ という小さな水音が耳の中に入り込む。

それと同時に少女の右手に、なにかドクンドクンと脈打つ赤い肉の塊 ビュッ！ ビュッ！と鮮血を飛び散らせながら脈動する心臓のような物体が握られていることに男は気がつく。

「な、なんだ、それは……。え、あ、うわあああああ！」

痛みは一切感じなかった。そんなわけで気がつかなかった。男は今になって自身の身に起きた異変の気がつく。

「お、お、俺の右胸に穴がああ！　ぎゃおおおおあああああ  
！」

男の右胸にサッカーボールよりやや小さめ風穴が開いている。だ  
けど、血は一切、滴り落ちてはいない。寧ろ、傷口が氷りついてい  
る。さて、男は自分の身に起きた異変に気がつくと同時に立ったま  
ま断末魔の悲鳴を上げて絶命する。

「うふふ、美味しそうな心臓……」

少女はペロリと口許を舐め、抉り取った心臓の頬ずりをしながら、  
恍惚とした表情でそうつぶやくと、その刹那、フツと空気の中に溶  
け込むかのように消え失せる。

それから数分、まるで時間そのものが停止したかのように思える  
ほどゆっくりと進んでいるかのように過ぎ去った頃、ここ凄惨な殺  
人現場と化した須佐野橋商店街の路地裏の廃ビルの物陰から、如何  
にも気の弱そうな少年……いやいや、ショートカットでジーパンと  
ジーンズという格好のせいから後ろから見るとどうしても少年のよう  
に見えてしまうボーイッシュな少女が、恐る恐るって感じの物腰で  
姿を現す。

前から見ると、どこか線が細く小柄でか弱そうな娘だ。年齢は1  
7、18歳くらいだろうけど、容貌が童顔なので15歳かそこらに  
見えてしまう。まあ、可愛い系ってところだろうか？

それはともかく。

「あ、あれが魔道書【流血文書】の化身アヴィラー……。狂子さ  
んからもらった“ペンダント”がなかったら今頃、僕も……」

チラチラと自分の周りを見回し、首から下げている燃え上がる眼  
が中央に描かれた五芒星を象った銀のペンダントを左手で握りな  
がら、ホツとしたようにつぶやく少女は、なにかを恐れ、気にする  
かのように抜き足、差し足、忍び足という感じで立ち去る。

さてと、狂子さんの名前を、そして魔道書【流血文書】というキ  
ーワード的な言葉をつぶやくこの少女は一体、何者なんだろう？



## 第一話「魔術師の町」その4（後書き）

### 魔道書【流血文書】について

8世紀頃の日本で書かれた書物で、文章の一字一字が血で書かれている。

著者は那羅華<sup>ならか</sup>という渡来人の仏教僧。

彼は別名、狂える仏教僧、大陸の外法を伝える者と言われていたという。

内容は九頭龍観音という蛸のような頭に触手のようなものを髭状のものを備えた顔が特徴的な異形の仏に108人の心臓を捧げることによって死後、浄土へ行くことができる<sup>と</sup>と説くおぞましい内容である。

写本も含めて30冊ほど書かれたが、時の帝によって発禁焚書となり、著者である那羅華ら九頭龍観音を崇める者すべてが殺害されたと言われる。

現在残っているものは、大体が江戸時代中期の古典文学者である名腰洋玄が、黒面教団という邪教徒によって強制的に写本されたものがほとんどある。

## 第一話「魔術師の町」その5（前書き）

ちよつと、ネタ切れ中かもしれません><

## 第一話「魔術師の町」その5

### 第一話「魔術師の町」その5

「うぬ、また猟奇殺人か……。一体、どこのどいつの仕業なんだ！  
まったく、何件起こせば気が済むんだ、殺人鬼め！」

バシツと手に持った新聞はテーブルの上に思い切り叩きつける俺、  
犬飼 修一の母親であり、某都道府県S市のベッドタウンである仏  
滅町の治安維持の一切を任されている警察機構 仏滅警察署に勤  
務する蒼十寺 茜警部の顔には激しい怒りが彩っている。

「ひゃああああっ！」

激しい怒りを新聞をテーブルに叩きつけることで表現する母さん  
の行動に驚いた楓さんが、ヘンな声を張り上げソファから転げ落ち  
る。ついでに、右手に持っていたスナック菓子の袋の中身をぶちま  
ける。その様子はまるでコントのようだ。

さて、そんな楓さんは俺の叔母に当たる人物だ。

「気弱ねえ、そんなことで驚くなんて……」

母さんは首を横に振りながら溜息をつく。

さて、母さんは実年齢より10歳は若く見える美人でいつも柔和  
な表情を絶やさない優しい人かな？ でも、一旦怒ると不動明王を  
連想させる怒りの権化と化す、実は怖い人だ。

まあ、それはともかく。

「そろそろ午後10時だわ。修一の奴、まだ戻ってこないわね。多  
分、狂子が連れ回しているんだと思うけど……」

母さんは一応、俺のことを心配しているのかな？ と思えるよう  
な言葉をつぶやきながら、夜空で煌々と輝く今宵の満月を窓辺から  
見上げるのだった。

安座主公園 仏滅町にある観光名所の中じやもつとも有名かも知れない公園である。この公園には6、7世紀頃の古墳があり、それを目当てに観光客が集まってくるとか……。

そういえば、大体一ヶ月ほど前だろうか？ ニュースや新聞で知ったことだけど、そんな安座主公園内にある古墳の玄室で殺人事件が起きたようだ。そのせいでしばらくの間、立ち入り禁止となっていたようである。

「くそー、あの女ああ！」

さて、俺は安座主公園の噴水池のところにいる。

安座主公園って場所は、フリーマーケットが祝祭日なんかによく開催されており、それなりに賑わうこともあるが、平日は特になにもないのどかな公園である。そんな昼間の顔とは打って変わり、夜の顔っていうのは10代、20代の若者を中心としたカップルやナンパ目的のハント族、路上ライブに興じる者などが自然と集まってきたり、夏になると近隣の暴走族が定期的に集会を開いたりしている場合もあるとか……。

まあ、賑やかなのは分かるが、周辺住民からの苦情の声が仏滅警察署に殺到している、とか……。俺も静かな公園

「はあ、こーゆー場所はマジで居辛いなあ……。しかも今居る噴水池のあたりは特にだ」

とまあ、俺、犬飼 修一はそんな安座主公園の噴水池のところにいるわけだ。

ああ、ちなみに、この場所は如何にもラブラブなオーラを身体から放出していそうな若い男女のカップルが特に大勢集まっている場所でもあり、なんだか居辛い雰囲気か……。

「むう、池に映る月も俺を馬鹿にしているようだ」

午後6時を過ぎると、午前8時まで噴水は止まり、その間だけ、ただの池になるのが、ここ安座主公園の噴水池である。それはいい



んだが、噴水が止まり、ただの池となっている安座主公園のそんな噴水池の水面に映る夜空の主役的な星である月を見てみると、なんだか俺に対する皮肉を煽っているように思えた。

「まったく、こんな場所になんで俺は！ カップル多すぎてウゼエエ！」

さて、周りにも聞こえるような大きな声で文句をだらだら言いまくり、八つ当たりとばかりに周りにいるカップルたちを睨みつけるそんな俺が、何故、ここにいいのか？

それは

「ぬあああああつ！ なにが修行だ！」

修行のためである……って、狂子さんが俺をここへ置き去りにしたわけだ、まったく！

狂子さん曰く、

『こーゆー混沌した場所でこそ、魔術師としての修行の場となる』

だそうだ。おいおい、ふざけるなつつの！ やれやれ……。

「は、なにが魔術師の修行だよ！ 馬鹿馬鹿しい！」

周囲に邪気を撒き散らせているのは、多分、俺だけだろう。

さて、そんな風にぶつくさ文句を言っていると、

「そのキミィー 夜の公園を徘徊してなにをしてるのかな……」

……。もしかしてナンパ目的い？」

なんだか図々しいっていうかなんていうか、とにかく馴れ馴れしい口調で話しかけてくる者が現れる。

「あああつ！ 誰だ、てめえ！」

俺はキツと睨みを利かせながら、馴れ馴れしい口調で話しかけてきた者がいる方へ勢いよく振り返る。

さて、そこにいたのはタンクトップにところどころを故意に破いてあるジーンズ、それにテングロンハットを被った金髪碧眼の白人女性であった。ちなみに、長身痩躯の美人であるが、虎や豹などの猫科の大型肉食獣を連想させるワイルドな女性でもある。ああ、年は俺と同じくらいかなあ……。

「ん、あたしはサリエル。サリエル・ハートウッド。ま、夜の公園をこよなく愛する暇人ってところね」

「ふ、ん、暇人ねえ……」

暇人？ まあ、確かに連れがいるならともかく、たったひとりで夜の公園を徘徊するような奴は暇人だよなあ……。っと、流暢な日本語で俺に対し語りかけるサリエルとかいう外国人の女に俺は少なからず警戒心を抱く。いや、警戒心っていうか怪しんで当然だ！

「それはともかく、俺になんの用事なんだよ？」

逆ナンパかな？ それなら嬉しいかも……。一瞬、そう思ったが、サリエルって女に対する警戒心がさらに強まる。んで、俺は思い切って話しかけてきたその用件を尋ねるのだった。

「うふふ、そうねえ……」

「む、む……」

ニヤニヤと微笑みながら、ジッと俺を見つめるサリエル。さて、そんな彼女の眼は蠱惑的な一方、蒼く澄んだ思わず吸い込まれそうになる眼である。

「へえ、アンタには“邪視”の効果もなしみたいね。うふふ、流石は蒼十寺 茜の息子のひとりだわ！」

「な、なんで、それを……」

右の目尻を弄りながら、“邪視”という言葉の口にする。それに、俺が蒼十寺 茜の息子である、と

「ふう、単刀直入に言っちゃうよ。あたしはねえ、アンタが持つて【幻獣の書】が欲しいってわけよ。はい、言ったわよ！」

邪視とやらが俺には効果がない。そのせいだろうか？ サリエルはいきなり逆ギレする。

おいおい、なんだ、お前は……。

「ふう、実力行使でOK？」

「はあ？」

実力行使って、おいおい……。今度なんなんだよ！

「どうっふっふっふう」 実力行使って言ったらこーゆーもので

しょうが！」

ボキボキと両手の拳を鳴らすサリエル。はあ、やっぱり暴力で解決かよ……。そう思ったが、次の瞬間、自前の豊満な胸の谷間から一冊の本を取り出す。けっこう分厚い本のようにだけど、B6かB7サイズのポケット辞書のような本である。

「こいつは『魔獣の書』！ 俗に魔道書と呼ばれるような曰くつきの本の一冊！」

自前の豊満な胸の谷間から取り出したポケット辞書かなって思えるB6かB7サイズの小さな一冊の本を『魔獣の書』と呼ぶサリエルが、そんな『魔獣の書』を頭上に掲げた瞬間、カツと眩い閃光とともに虎や獅子などの大型肉食獣とほぼ同格の大きさの1匹の狐が飛び出してくる。んで、よく見ると尻尾が9つも……。

「あたしの相棒の1匹、九尾の狐のマイケル君よ！ さあ、マイケル君、アイツをぶっ殺しなさい！」

「ギャオオオオオオオッ！」

主であるサリエルの命令には絶対服従なのか？ 九尾の狐ことマイケル君は甲高い咆哮を張り上げながら、俺に対し、飛び掛ってくるのだった！

人間とは冷たい生き物だ。

同じ人間としてつくづく思うことが多々ある。

目の前で都合の悪い物事が発生する我先にと逃げ出すし……。

まあ、そんなこんなで俺が今居る安座主公園の噴水池のぐるりと周囲を見回すと、あれだけラブラブなオーラを放っていたカップル達の姿が一組も見受けられなくなる。

はあ、ちったあ助けてくれていいじゃないか！ 冷たいぜ、まったく……。

ま、そう思っても助けられるはずがない。俺の目の前には名前は可愛いが鮮血に染まった赤い眼、底知れぬ狂気が具現化したような

鋭い牙、禍々しい邪悪なオーラを身にまとった居てはいけない生物  
九尾の狐のマイケル君という魔獣が立ちはだかっているのだから

「マイケル君は菜食主義の狐さんだけどねえ……。犬猫や人間もペロリと食べちゃう肉食主義でもあるのよねえ」

マイケル君の背中にライドオンするサリエルは、口許に狂気が彩ったような笑みを浮かべながら、俺に対する脅し文句かなって思えるような言葉を吐く。

「要するに雑食性って言いたいんだろ！　つーかよ、なにがなんだか分からないぜ……。そんなわけだ、逃げる！」

明瞭な殺気が渦巻く禍々しい閉鎖空間の奔流に俺はいるのかもしれない。

それはいい！　今はこんな奴を相手にしているわけにはいかない！　危ない輩からは逃げるのが一番である！　俺は咄嗟に逃走しようと踵を返すのだが

「あらあら、逃げるなんて男らしくないわね。その前に足が竦んで動けないんじゃない？」

「な、なにお！　う、うあああ……」

人間、一度、なにかしらの恐怖心のようなものを抱くと足が竦むものなんだな……。俺はそれを実感する。

「さあてと、さっさとアンタが持っている【幻獣の書】を奪っちゃおうかな。この場所は五月蠅い警察の目のつきやすいし、邪視で一時的に麻痺させてある連中が騒ぎ出す前にやっちゃうよ！」

「う、うぬう……」

ペロリと口許をナメながらサリエルがそう言うと、まるで呼応するかのようにマイケル君が、今すぐにでも飛びかかれるような臨戦態勢に入る。その眼には、明らかに殺気が彩っている。

（うっ、こーゆー危機迫る場面で助けに来るのがヒーローって奴だろ！　ああ、俺はなにを言ってるんだああ！）

と胸中で神頼み、いや、ヒーローの出現に期待するバカな俺がい

たりする。

「はあ、こんな時に俺って奴は……。」

『助けが必要ですか、ご主人様？』

「えッ！？　なんだ、今の声は……。」

「空耳だろうか？　そんな声がどこからともなく聞こえてくる。」

「なにぼやいているのよ！　死ぬ前の神頼み？　アホくさあゝ」

「そんな俺に対し、サリエルが愚痴を言う。どうやら彼女には聞こえていないようだ。」

「ど、どうでもいい！　この場から逃走できればなんでもいい！」

『かしこまりました、ご主人様。では……』

「うお、【幻獣の書】が！？」

こんな分厚くて重い物をなんで持つてるんだって感じである俺が右腕で抱え込む一冊の本　魔道書【幻獣の書】が、夜空で輝く今宵の満月を筆頭とした星々が一瞬、すべてかき消され、白一色の虚無の空間に思えるような激しい光を放つ！

「な、なによ、一体！」

サリエル&マイケル君も、一瞬とはいえ、なにかもが白一色の虚無の空間へと変貌したかのように思える激しい光の奔流の前では流石に怯みを見せる。

「うお、なんだ、なんだ！？」

さて、魔道書【幻獣の書】が放つ激しい光の奔流は刹那の一瞬で消え失せる。で、元の暗い夜の風景が不気味さと静けさを演出する安座主公園の噴水池の目の前、という空間へと回帰すると同時に、俺の眼には、背中に一對の烏を連想させる漆黒の翼が生えた夜の闇の中に溶け込むかのような黒い一頭の馬の姿が映り込む。

「ペ、ペガサス！？」

「ご主人様、さあ、私の背に！」

「お、おう！」

早く自分の背に！　背中に一對の翼の生えた黒い馬　ペガサスは、俺に対し、そう語りかける。で、俺は大急ぎで、そんなペガサ

スの背に飛び乗るのだった。

その刹那！ ペガサスは爆風のような激しい風を巻き起こしながら、漆黒の夜空へと勢いよく舞い上がり、俺をその背に乗せたまま疾風のようにいずこかに飛び去る。

「うひゃあああ！」

ペガサスが夜空へと舞い上がると同時に巻き起こした爆風のような激しい風によってマイケル君の背中から地面に落っこちるサリアルは、後頭部を強打……。そんなわけで白目を向いて昏倒する。

なんだか、呆気ない幕切れって感じた。だけど、助かったのは事実。

「あはは、面白い生き物だねえ」

夜の闇と一体化したような黒い影のようなモノが、夜空へと飛び上がるペガサスの背に騎乗した僕の様子を傍観している。

「欲しいね、欲しいね、あの生物！ いいや、あの本を、魔道書【幻獣の書】を！」

黒い影は両手を広げ、歓喜の声を張り上げながら、夜空を仰ぐ。

「うふふふ、そろそろ、あの“書き込み”に釣られて、この町へとやって来た魔術師の数も相当数になったかな……。さあ、これから面白くなるぞお」

黒い影は、気味の悪い声色の笑い声を張り上げながら、フツと空気の中に、夜に闇の中に、その不気味な姿を溶け込ませるように消失させるのだった。



## 第一話「魔術師の町」その6（前書き）

最近、mixiにはまっちゃいましたw  
そっちでも小説を書いていますw



## 第一話「魔術師の町」その6

### 第一話「魔術師の町」その6

仏滅町には、7月、8月でも萌え咲き乱れる超遅咲き桜が密生する並木道がある。

んで、その先にある冥皇学園という月皇学園という女子高と、理事長とやらの不祥事だか経営破綻か？ とにかくなにかしらの理由で廃校が決定した男子校の冥心学園の合併によって誕生した新設校がある。

でも、校舎自体は新校舎とは言えず、月皇学園の校舎を少しばかり増設して再利用している様子だ。ちなみに、一度入学すれば小中高、そして大学までエスカレーター式に進級できる付属校であり、近日中に俺、犬飼 修一の弟、修二が初等部の6年生に編入予定である。

「まったく、なんなんだか……」

俺は今、銀月という超遅咲きの桜の木が密生する並木道と、その先にある冥皇学園の丁度、狭間にある喫茶店の店内の窓際の席でコーヒークップを片手にくつろいでいる最中である。

そうそう、今、俺がいる銀月って名前の喫茶店の店主である宮森春子さん<sup>イェ</sup>だけど、某三星レストランで働いた経験がある洋菓子<sup>パンテ</sup>職人で、その経験を活かした作られたケーキ等の洋菓子が冥皇学園の生徒たちを筆頭とした近隣の女子高生、女子大生を中心に大人気だとか。

そんなこんなで店内をぐるりと見回すと、10代、20代の若い女性ばかりである。

まあ、その中には、この喫茶店、銀月のウエイトレスの制服を目的にやって来る男どもの姿もあるわけだが……。

言っておくが、俺はそのひとりじゃないぞ！

それはともかく。

「あのお、向かい側の席に座っちゃっていいですか？」

「ん、ああ、かまわないけど……」

とニコやかな笑みを浮かべる言いながら、俺が座ってる窓辺の席の向かうに座ってもいいか？ と訊いてくる今の時間は午後12時半、つまり昼時なんだが、白と赤のストライプのパジャマの下に星の絵柄たくさん散りばめられたナイトキャップという時間手に場違いな感じがする格好をした金髪碧眼の外国人の美女が現れる。「なあ、他人の俺が言うのもなんだけどさ。一応、今は午後12時半、昼間なんだが……」

ん、さて、とりあえず俺は、今の時間帯を教えてみる。時間帯を考えると場違いな感じがするので……。ふう、我ながら余計なことが気になるもんだなあ。

「みゆ！？ あうつ……！」

と今更、自分の今の格好に気がつき頬を赤らめるが、今にも眠こけてしまいそうなトロンとした表情を作りながら、

「あ、私はサマエルと言います」

と名乗る。が、その刹那、案の定とばかりに眠り込んでしまふ。

おまけに、大きなイビキと涎が口許から……。おいおい……。

「はあ、なんなんだよ……」

そんな様子に俺は、首を横に振りながら、大きな溜息をつくのだった。

「ふむ、難見沢組の抗争問題か……。懲りない人たちだこと……」  
「ん！？」

さて、店主である宮森 春子さんが、丁度今、放映中の地元テレビ局のニュース番組に対する愚痴をこぼすそんな声に俺に耳を傾けるのだった。

雛見沢組って言うと、某都道府県S市のベッドタウンである仏滅町で幅を利かせる暴力団である。

仁義に厚く、堅気の人間の絶対手を出さないことがモットーの暴力団らしいが、それも過去の話である。

今では、全組長である雛見沢 源三郎の死によって、彼のふたりの息子、亜蓮<sup>アレ</sup>と真楠<sup>まぐす</sup>の間で後継者問題が勃発する。

ま、それが原因で、ここ最近、暴力沙汰が多い。それはともかく。

「瑞希ちゃんはお知ってますう？ 雛見沢組の先代組長って人おは世界的にもお有名なあ魔術師だったらしいわよあ！」

「えええ、マジで！ どこでそんな話を知ったわけ、明日香！」

ニユース報道を見ながら、そんな話で盛り上がる女子高生らしいふたりの女の子の方に俺は視線を向ける。

「んん、なに見てるのかなあ〜」

さて、女子高生らしいふたりの女の子のひとり      どころなく慌て者な感じがする髪の長い娘の方が、俺の視線に気が付くと、そう言いながら近寄ってくる。

「な、なんだよあ！」

俺はギラリと睨みを利かせる。

「ふふん、もしかしてお兄さん、あたしに気があるわけ？」

「はあ？」

ふたりの女子高の片割れである髪の長い方の娘は、ニヤ〜と笑いながら、俺の隣に図々しく座ると、右腕にすりすりまとわりついてくるのだった。

「な、なんだ、この娘、馴れ馴れしいなあ……」

「ふふん、だつてさ。お兄さん、かつこいいんだもん！」

「うぬっ！」

「あ、あたしは瑞希よ！      宮森 瑞希よ！」

これって逆ナン？ 嬉しいような、嬉しくないような……。微妙な感じだ。

「瑞希ちゃん、ダメよお知らない人にい馴れ馴れしくしちゃ」

「うにゅ……。そう言うけどさ。明日香だって反対側に……」

「おいおい……」

ふたりの女子高生の片割れその2      なんだか鈍くさい感じがするツインテールの娘がいつの間にか、俺の左腕に手を回したかたちでまわりついている。おいおい……。

「うふふ、モテますね」

とテーブルを向かい合うサマエルと名乗る外国人女性が寝ボケ感の笑みを浮かべている。起きてたのかよ、アンタ！

うつむ、なんなんだよ、一体……。

「あ、やっぱり昨日の！ 見つけたわよ！」

「うあつ！」

今度は背後から、そんな声が……。んで、俺は苦笑を浮かべながら、背後を振り返ると、昨日の危険な女、サリエルの姿が！

「あら、姉さん。奇遇ね、こんなところで出会うなんて」

「うふふ、サリエルちゃんこそ」

サマエルとサリエルはお互いの顔を見つめながら、ニタツと同時に微笑む。

「う、アンタら姉妹なの！？ つーことは……」

どうやらサマエルとサリエルは姉妹のようだ。顔立ちなんかはホントそっくりである。ああ、とりあえず年齢や髪型が違っただけかな？

「うふふ、私はなにもしないわよ」

「うふ、昨日のリベンジと洒落込もうかしら？」

なんだか相反する言葉を口にし、俺を困惑させるサマエルとサリエル姉妹。

「ねえねえ、なんの話！ 聞かせて、聞かせて！」

「気になりますぅ、是非とも聞かせてくださいですよー！」

はあ、今度は瑞希と明日香の馴れ馴れしいふたりの女子高生が割

つて入ってくる。まったく、なんなんだよ！

「あ、UFO！」

逃げる口実を作るべく俺は、そんな小学生でも思いつくようなことを口走る。はあ、我ながら情けないような気が……。

「え、マジ！？」

ブーツとしており、如何にも頭の中は空白状態って感じのサマエルを除く3人　サリエル、瑞希、明日香は、なんと呆気なく騙され、バタバタと忙しくなく店の外へと飛び出して行く。おいおい……。

「あ、ちよつと裏口から失礼させてもらいます！　では！」

一応、店主である宮森　春子さんに一礼すると、俺はここ喫茶店　銀月　の裏口から外へと飛び出すと、一目散に自宅がある方向へと駆け出すのだった。

「あらあら、どうしたの？」

店主である宮森　春子さんは不思議そうな顔で、裏口から外へと飛び出していった俺を不思議そうに見つめるのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9398a/>

---

雉飼 狂子と魔術師たち

2010年10月9日23時42分発行